

The Gallery voice

NO-24

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里373 TEL/FAX(098)888-6117 /2006.5.12

＝フランクステラ 展によせて＝

世界の近代美術文脈を語るとき、近代モダニズム発生は19世紀末ヨーロッパ印象主義のセザンヌを出発点と見るのが一般的である。その後はゴッホやゴーギャンと続き20世紀の初頭には、マティスやブラマンクの前衛派、ピカソやブラックのキュビズム、カンデンスキーやマーレビッチの抽象主義、ミロやダリのシュールレアリズム、M・デュシャンのダダイズム、更にモンドリアンの造形主義の流れで20世紀の前半は終わっている。

＜現代美術の出発点となった抽象表現主義＞

1945年第二次世界大戦後の世界の美術シーンはヨーロッパからアメリカのニューヨークに移った事は常識として語られる。デクーニング、に始まりJ・ポロック、M・ロスコーらの出現（抽象表現主義）によりニューヨークは現代美術の出発点となった。一方ヨーロッパではJ・デビッフェらのアンフォルメル（新抽象主義）がニューヨークの動きに対抗するかたちで現れる。

ロスコーやポロックが活躍した50年代の抽象表現主義、その後その主流に対抗する多くのイズムが出現する事になる。ネオダダイズムのJ・ジョーンズやラウシェンバーグ、ミニマリズムのF・ステラ、更にポップアートのリキテンシュタイン、A・ウォーホルらの出現でニューヨークは現代美術の揺るぎない中心地となった。その陰で支えていた米国の経済力の後押しも忘れてはならない条件であるが。そのような多様で混沌とした状況と流れの中で、ミニマルアートは近代美術から現代美術へ通過していく過程の「ブラックホール」的存在と言える。ミニマリズムは文字通り最小極限の芸術（造形）であり、個人的な感情や主観的表現を排除し、単純な行為を反復する禁欲的な芸術表現である。物事の「本質」から目をそらすことなく、「目の前のモノが何であるか」ステラが発した「見えるものだけが見えるものなのだ」と言うあまりにも有名なミニマルの極地の言葉は現在も「本質論」に於いて生き続けていると言える。その事を現在の沖縄社会状況にミニマルのフィルターを押しあててみよう。我々は見ている見ない振りをしてないだろうか、脳神経が鈍磨してみえないのか。目の前に広がる広大な米軍基地を見て、「本質」の坂を下ってゆくと「何かが」みえるはずである。

「ブラックホール」を通過したステラは、思考を止めることなく今日の時代の人類社会状況と伴走しながら作品展開し反映させている。20代前半単純な平面のブラックストライプから出発したステラ、今年で70才を迎えるがその制作意欲は衰えを知らない。最近ではアルミやステンレス、合金を素材に立体にまで発展した多種多様多次元の世界へ拡大し新抽象表現主義の最前線にいる。それらはポストモダンの動きと連動しているのだが、安易なプレモダンのエキゾチズムに陥らず、より「本質の核分裂」を促している。異質と同質、異常と正常、マイノリティーとマジョリティー、同次元と異次元、個々のパーツがニュートラルな空間でベクトルをもって自律し、調和した美しい物体として存在している。私たちはそれらの作品から今日社会の在りようの諸問題を含む「共生」と「尊厳」の深いメッセージ性を発信している事に気づかされるであろう。この事は今回の展示された数点の作品からでも読み取ることが可能だ。「ミニマリズムの旗手」とも言うべきフランク・ステラの60年代から今日に至るまでの作品の軌跡をたどるきっかけを持つ事は、今日に於いて意義のある事だと確信している。我々沖縄社会に於いても、また広く日本社会のマイノリティー対処の諸問題に対しても、課題解決や論考に本質まで至らない類がどれほど流布していることか。ステラのミニマル作品から現在の新抽象表現主義に至る経緯は我々に大きなインパクトを与えるだろうし、今日でも有効だと思う。更に、今日のデジタル社会が生み出す多くの問題や課題が浮上しては来ないだろうか。今度の展示会が硬直した現代社会に一矢を投じるきっかけに成ればと思うのである。（上原誠勇）

.....
*1988年4月1日のバブル期に創刊した当GV紙も1994年12月1日 23号をもって休刊していた。
今回の画廊の企画展再開を機にセットアップしたい。次号は3年前に急逝した美術家「渡名喜元俊」氏の仕事を振り返り、数人の論客に語ってもらう予定である！

.....
読者皆様からの寄稿、投稿も期待しています。入稿はメールで / E mail : se-u@tontonme.ne.jp
.....